

3月30日（月） 受難週は心の中を

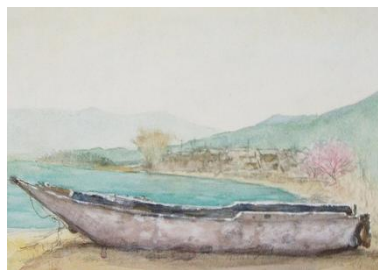
「こうして、イエスはエルサレムに着き、宮に入られた。」（マルコ11：11）

棕櫚の聖日にエルサレムに入京された主は、その足で、神殿に行かれました。そして、そこで「すべてを見回った」。

翌日には、さまざまな商売や欲でごった返している神の宮を清められます。

イエスさまが入って行かれるのは、霊的な営みの中心である教会や私たちの心の中です。そこに主の最大の関心があります。そのことを深く覚えるのが受難週です。

主が、今週、あなたの心の中をすべて見回ってくださいますように。そして、不純な余計なものを、神の宮にふさわしくないものを清めてくださいますように。



3月31日（火）キリストを敬う

「しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう』と言って、息子を遣わした。」（マタイ21：37）

ぶどう園の農夫のたとえ話でイエスさまが語られた言葉です。ぶどう園とはイスラエルのことであり、また私たち神の民のことです。

神様ご自身がその所有者で、そこに必要なものをすべて備えて、私たちに貸し与えておられるの

です。

主人は、ご自分のぶどう園を見に、そしてそこからの収穫物を期待して、しもべたちを定期的に遣わすのですが、農夫たちは、すべて自分のものとして独占しようとして、それらのしもべを辱め、また殺します。

最後に、ぶどう園の主人は息子を使わされました。それがイエスさまです。

息子を遣わされた神様の期待は、非常に素朴でした——「私の息子なら、敬ってくれるだろう」。キリストを敬う、尊重する、重んじる、大切にする。どういう表現でも、それはごくごく素朴な信仰者のあり方です。私たちが何を一番大切にし、重んじているのか、それはイエス・キリストなのです。自分の願いでも、自分の生き甲斐でも価値でもありません。

4月1日（水）滅びるものと決して滅びないもの
「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」

（マタイ24：35）

イエスさまは、受難週に入ってはじめて、終わりの日の予告をされます。それは、この世界の終わりであり、また私たちの人生の終わりにもつながる教えでした。

すべてのことに終わりがあるということです。その終わりを考えないで生きることは、愚かなことだということです。

私たちの心には、「人生、今が良ければ」という思いがどこかに潜んでいます。10年、20年先を考えてせいぜいなのですが、死を念頭にした、自分の人生の最後、この世界の最後をあまり考えません。

天地を巻き込んでの終末から、誰が逃れることができません。その霊的現実をしかと把握することがどんなに私たちの生き方を変えることか。そのうえで、「しかし、わたしのことばは決して滅びることはありません」とおっしゃった主のみことばに生きることを目指していきたいのです。



4月2日（木）イエスの祈り

「シモン、シモン、見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために、祈りました。」（ルカ22：31～32）

麦のようにふるいにかけられる人生です。私たちは自分自身も弱いのです。しかし、それだけでなく外の力が私たちの人生をふるいにかけるほど、強く働いて、私たちを患難に陥れます。

その中で、あなたの信仰は主の祈りによって支えられているのです。自分の祈りが、自分の力、私を支えているのではなく、最後、困難の中で私の信仰を支えているのは、知らないところで祈ってくださっているイエスさまです。

イエスさまの言葉は、「だからあなたは、立ち直ったら……」と続きます。必ず立ち直るように、主は祈っていてくださいます。

4月3日（金） 十字架の上で

「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになる
ときには、私を思い出してください。」

（ルカ23：42）

十字架につけられたのは、イエスさまだけでは
ありませんでした。イエスさまと共に、二人の犯
罪人が十字架につけられます。その一人が、苦し
みの中で、息も絶え絶えで主に訴えたことが、「私
を思い出してください」でした。

昨日、激しい患難を通るペテロを、主が祈って
支えてくださるというお約束に心を留めました。
十字架につけられた犯罪人は、イエスさまに覚え
ていただけるように訴えているのです。

すべてはイエスさまです。この方こそ、私たち
の人生の支えであり、力であり、目標であり、す
べてです。そして、この方は優しくしっかりとこ
の男に語りかけました。「まことに、あなたに告
げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダ
イスにいます」（43節）。大丈夫。私はあなた
を覚えている、と。



4月4日（土） 次の日がある

「週の初めの日の明け方早く……」

（ルカ24：1）

十字架は金曜日。聖書は、土曜日のことは何一
つ記していません。安息日で休んだ、とあるだけ
です。イエスさまが十字架の上で息を引き取られ、
墓に埋葬されます。それでも、残酷なまでに「次
の日」がやってくるのです。そのような歴史の巡
りの中を私たちもまた生きています。どんなに辛
く、これで終わりと思うような時でも、次の日は
やってくるのです。

まず、次の日は土曜日でした。重苦しい、外に
出ることができない、すべてが終わったと思うよ
うな日でした。そういう日も、「次の日」の中
には、含まれています。

しかし、週の初めの日、主はよみがえられまし
た。栄光の復活です。私たちが通るトンネルは、
時として先が見えず、いつまでこの暗闇が続くの
だろうと、じっと耐えるだけしかないときもある
でしょう。しかし、「次の日」は来ます。栄光の
日が来ます。そのことをイースターは教えている
のです。

主の十字架を想う

2015

3月30日～4月4日

